

韓国「炭焼長者」譚の分析と比較

朴 福 美

Comparative Analysis of Korean Folk Tale Wealthy Charcoal Farmer First marriage type and Second marriage type

Pogmi PAK

、はじめに

日本の「炭焼長者」譚とは山の中に住む炭焼き男のところにある日身分の高い女が押しかけ女房として現れ、黄金の価値を教えてくれたおかげで大金持ちになる話である。金は炭焼き場にあり、女はむこうから来てくれるから、それらは炭焼きの持って生まれた幸運譚であるし、致富譚でもある。しかし女が初婚か再婚かによって下位分類がされることから、少し違和感がないでもない。

「炭焼長者」譚は芦刈説話¹⁾との関連性が言われ、文献で確認できる最も古い説話に属するものと言われる。柳田国男は「炭焼小五郎が事」²⁾で「これほど奇抜にして複雑な話がこれほどの類似を持って偶発することはないと信じ、何人かが運搬してあるいたとすれば、それは炭焼きの業ともっとも親しかった者が、古くは信仰とともにある地方からもって出たので、これを豊後とすれば比較的に鑄目が合うように思ふだけである」³⁾といい、炭焼きの業ともっとも親しかった中古実在の鑄物師が、大分県の宇佐の信仰のきわめて神秘なる部分、黄金の御正体を語ったものではないかとしている。

神道が日本固有の信仰だという大前提で柳田国男は話を進めているのだが、現代では金田久章が「このグローバリズムの時代にもはや何をもってして固有信仰と名づけるのであろうか」⁴⁾というように、神道が日本で発生したものであるかについて疑問がもたれている。また伊藤清司は炭焼長者型の説話そのものが隣の朝鮮半島にもあることが問題であり、中国や東南アジアの炭焼長者型説話の構造も日本のものと基本的に同じであることを挙げ、国産説話説に大きな疑問を投げかけた⁵⁾。そして『昔話・伝説必携』⁶⁾では炭焼長者の履歴書として「中国・朝鮮の周辺諸国にも類似

の話があり、冶金術とともに伝えられたのであろう」とする。国産説話は克服されたようである。

しかし発生源や、構造をほとんど同じくする<初婚型>と<再婚型>がなぜ存在するかについての言及は今なお見られないようである。単なる致富譚であるならば奨励されるはずのない離婚と再婚を扱う<再婚型>が広く存在する必要は無いように思われる。このような疑問解決への接近方法として、朝鮮半島の「炭焼長者」譚を検討してみたい。

朝鮮と中国の「炭焼長者」譚については上の伊藤清司の詳細な論文があるが、ここには朝鮮の再婚型が紹介されていない。

韓国では1980年代に韓国精神文化研究院から「韓国口碑文学大系」(以後体系とする)82巻⁷⁾が刊行された。専門の学者を組織的に動員して採集されたもので、張壽根の評価を借りれば「もちろんこれが完璧な収集とはいえないが、この先これと比べられるほどの作業はありえない決定的な集大成として、これは以後韓国の説話の伝承と分布の大体の全貌を把握するための画期的な」⁸⁾資料である。朝鮮民主主義人民共和国の分がないが、朝鮮の説話の基本的な資料である。しかしこの資料を活用するには相当の語学力が必要となる。目的の話型を探し当てるにはまず体系特有の分類法を理解しなければならないし、探し出した話は逐語的な記録で混乱し、ほとんどが方言で話されるので理解が難しい。

韓国では「炭焼長者」譚は<初婚型><再婚型>ともによく知られたものであるにもかかわらず、<再婚型>が日本に紹介された形跡がないのはこんなところに原因があるのかもしれない。

、韓国の「炭焼長者」<初婚型>

体系の分類は「715 - 1 炭焼き青年の純金塊」で<初婚型>も<再婚型>もここに分類されている。この中から<初婚型>として24編、<再婚型>として22編、<混交型>として7編を分類し分析する。各地域満遍なく収録されており、よく知られた話型である。

要約 1、地位や財産のある父親が三人の娘に誰の徳で生きているかと聞く。

2、姉たちは父のおかげと答えるが、末娘は自分の徳だと答えたため家を追い出さる。または身一つで炭焼きに嫁に出される。

3、山中の一軒家に一夜の宿を乞い、翌日老婆の代わりに炭焼き場に昼食を運ぶ。

a、炭焼き釜が金塊。 b、水汲み場や石堀が金塊。 c、女が祈ると石が金塊になる。

4、夫を説き伏せ、石を売る方法を指図して売り、大金持ちになる。

5、実家の没落を知る娘は知恵を働かせて父親と再会する。

a、自分の名前を叫ぶ門を作る。 b、自ら訪ねていく。 c、こじき宴会を催す。

6、父親に自分の徳で生きていること、実家は自分の徳で栄えていたことなどを確認して、孝養を尽くす。

娘の家族の構成

父親；地位があつたり金持ちだつたりするが単に父親とだけ言われるものも9件ある。最初から夫婦だつたりして父親への言及がないものも2件ある。

母親；存在するが影が薄い。夫が、戯言に対する答えが気に食わないからと娘を山の中に捨てさせたり、通りすがりの炭売りにくれてやっても抗議ひとつしない。せいぜい娘に金目のものを与えるくらいだ。夫と一緒に乞食の旅をしたりする。

娘；娘のみ三人が14件。5、6人とか沢山とも表現される。主人公は末娘か三女、まれに五女。

息子；息子はいいない。息子の不在を強調するものが4件。例外的に「手なし娘」のモチーフと結びついたものに息子がある。娘にとっては腹違いの弟であり、援助者ともなる。

以上のように娘の家族は男1対女4、または女多数となる。数の上では女が優勢だが、家父長の權威に異議を申し立てられる立場の者が一人もない。家父長に正面から意見できるのはその両親ぐらいだろうがその影さえない。将来父親の立場を侵す可能性のある息子もない。例外的な息子は、姉を殺そうとする父親に手首を切るだけにしたらと意見する。だから息子がいると父親の意思は貫徹されない。

「誰の徳」問答

そんな父親がお前たちは誰の徳で食べて生きていくのかと聞く。この「誰のおかげで食べているのだ」というセリフは、現代でも専業主婦にとって無縁と言い切ることはできないかもしれない。ところがこの父親は妻には聞かない。妻が「あなたのおかげで食べて生きています」と答えても、当然過ぎてうれしくないのかもしれない。また朝鮮朝時代の上層の女は嫁に行くとき一生分の食い扶持と衣類を持参し、召使も同行させたといわれるからそんな妻には聞くことができない。

父親は戯れに、たまたま聞いたのではないらしい。毎日のように聞くと語るものもある。父親の期待に応えてお父様のおかげで暮らしておりますと答えた長女と次女も、心中穏やかならぬものがあつたのかもしれない。その気持ちを口に出したのが末娘である。末娘の答えは

- a、父母が死んだ後子供は生きていくのだから、親の徳だけでは生きていけない。
- b、自分の徳でこの家族を養っている。
- c、自分で働いて生きていくのが願いだ。
- d、人は自分の徳で生きるのであつて、誰かの徳で生きるのではない。

aは合理的だし、bはこの末娘の巫女性を示すセリフである。cはもう親の庇護を必要とする時期は終わったから自立したいということだ。dは他人の働きをくすねて生きていくべきでないとも言い換えられる。返事はすべてまっとうで、望ましくさえある。しかし家父長的權威は娘を嫁に行くまで支配し、自立などという選択肢は与えない。家父長的權威をこの父親が体現しているといえよう。〈初婚型〉を父親像に注目したとき〈權威的家父長型〉とも言える。

自立への道

一般的に父親は娘が、とりわけ末娘がかわいいというが、権威的父亲としては娘に一方的に愛を与えていると考えているのかもしれない。しかし家父長的愛はその権威に反抗すれば厳しい見せしめをする。反抗した娘は袋に包まれ、かごに載せられて深い山の中に放置される。あるいは、たまたまやってきた炭売りに身一つで嫁にやられる。炭焼きは真っ黒で、三十過ぎても結婚できない青年である。そんな結婚は家格も合わないし父親としての体面は丸つぶれだが、それも意に介しない程に父親の怒りは激しい。

末娘は自分の発言がどんな結果を招くか十分わかっていて、父親の怒りに詫びを入れることは一切ない。父親の反応を予測していたかのように出て行けというなら出て行きますと答え、絹服に着替え、あるいは一握りが釜いっぱいになる福米を持ち出し、炭焼きの婿はどうかと聞かれると進んで嫁に行く。山の中に置き去りにされて思わず泣く末娘もいるがそれも一時、すぐに現状を理解して暗闇の中の灯りを求めてあばら家に辿り着き、一夜の宿を交渉する。

炭焼き家の家族

炭焼青年；貧しいために三十過ぎても結婚できない。朝鮮朝では結婚しないものは大人として待遇されないし、結婚は人間としての義務とも思われていた。

老母：老母の存在を言うのは9例。

炭焼き家は老母との二人暮らし、あるいは一人暮らしで父親はいない。老いては子に従うという儒教の教えからも家長は青年である。しか敬老精神が発達しているからか、実際には息子といえども母親の意向を超えて権力を行使することはできない。だから一晩泊めてくれという娘の頼みに息子の許可を求める母親はいない。また母親は仕事をして帰ってきた息子に対し、未婚の男女が一部屋に居るのは礼儀に反するとして、食事も寝るのも寒い台所の土間でさせたりする。つまり名目と実質を備えた家父長がない。

娘は権威的家父長から権威的家父長のいないところに逃れてきたのである。

金塊に関して

娘は積極的に申し込んで妻になっていたり、金塊発見後に結婚したりするが結婚に関してはいつの間にかしていることも多い。娘は炭焼き場に食事を運んで金塊を発見する。朝鮮では外で働く男たちの居場所がわかっている場合、女たちが昼食を運んだために金塊発見の設定は無理がない。金塊は炭焼き青年のテリトリーにあるのだからそれは青年の財産であるし、たとえ今は気がついていなくても市場で売り買いをしているのだから、いつかその価値を知るときが来るはずである。運があるのは青年であり、娘はそのきっかけを作ったに過ぎない。ところが語り口はそれを否定する。

娘は炭焼き場に行きもしないのに枕石が金塊であると知っていたり、齋戒沐浴して祈りをささげ

た後金塊を取り出したり、また多くは娘が見るとそれは金塊だと表現される。炭焼きの青年や老母が見てもそれは真っ黒い石でしかないと補足される。つまり金塊は青年が炭焼き釜を作ったときから金塊の原石であったわけではなく、娘の祈り・目・意思が単なる石を金塊に変えたことが強く暗示されている。同時に神しかなしえないそんな業を娘が行ったときから、金塊が本物の金塊ではなく象徴性を帯びた何かではないかという疑いも頭をもたげてくる。

金塊の売り方

この疑いは金塊を売るとき、いっそう明確になる。売り方には二つの方法がある。

a、どこそこの市場で、夕暮れ時、白い髪と白い衣装の、杖をついた老人に、値を聞かれたら金の価値でと答えるなど事細かに指示し、夫にはわけのわからないまま金塊が売れる。16例。

b、娘がトリックスターになる。石塔を積み、一番上に金塊を載せる。ふもとの長者が朝日に輝くその瑞気を感じて自分の全財産と交換しようと持ちかける。娘は長者の財産から運びこむことを条件に承諾する。長者は自分の財産の一番上のものを記念に取り除けて運ぶ。娘も一番上の金塊を取り除けて長者に渡す。長者は破滅する。3例。

このトリックスターのモチーフが3例と少ないのは、朝鮮社会が農業を国の根本としことと無関係ではないだろう。娘の行動は商道德としては非難されないが、農業社会では超能力を持ったものが持たないものと取引するのは公平でないと感じるだろう。

石と金塊の区別がつかないのは炭焼きの夫や義母だけではない。市場ではすすけた石を売る馬鹿がいるとあざ笑われる。金塊の価値を知るのは末娘以外には仙人のような老人か、あるいは長者だけである。世俗的な市場で売買する人々やその日暮の炭焼き親子の目には石でしかない。

父親との再会

慈父とか夫婦で始まるため、構造上再会モチーフがありえない2例と、忘れられた可能性の高いもの1例以外は父親との再会を果たして孝養を尽くすことで話が終わる。再会は父親が偶然訪れる場合にも十二の門や名前を叫ぶ門が建てられて、数多くの物貰いの中から父母を識別する。娘は実家の没落と父親がいつか尋ねてくることを知っていて、積極的に再会の努力をしている。

こじき宴会は有名な「沈清伝」でも、盲人の父親との再会のために開かれているが、これはめでたい還暦などの祝いでは、招待はなくても食事の接待をしたことによるものだろう。

娘は父親が富裕であったのは自分の福分であったこと、人は自分の徳で生きていくことを父親に納得させてから孝養を尽くす。

、韓国の「炭焼長者」〈再婚型〉

再婚といっても厳密に言うと同じ男と二回、炭焼き青年と一回の結婚だから再再婚である。

要約 1、生まれた息子が貧相であることを知った父親が福運の娘との結婚を画策する。

a、観相型。宰相は観相の能力があり、息子の乞食運を知る。全国を行脚して探し出した福運の娘は白丁。

b、産神問答型。野宿をしていた男が産神の問答を聞く。男児に運がなく女兒に福運を持たせたという。家に帰ると同時に妻が男児、隣の白丁宅に女兒が生まれている。

2、二人を結婚させ家は栄えるが、父親の死んだ後息子は白丁の妻を嫌って追い出す。

3、白丁妻は山中の一軒家に一夜の宿を乞い、翌日炭焼き場に昼食を運ぶ。

a、炭焼き釜が金塊。 b、土手の石が金塊。 c、検査する。

4、夫を説き伏せ、石を売る方法を指示して売り、大金持ちになる。

5、前夫の没落を知る白丁の妻は、知恵を働かせて前夫と再会する。

a、こじき宴会を開く。 b、前夫が物乞いに訪れる。 c、自ら訪ねていく。

6、a、身一つで、または財産を半分に分けて前夫と暮らす。

b、前夫を養う。

身分違いの結婚

観相型；観相ができる父親は身分と経済力がある貴族層である。富裕な貴族は学問をする余裕があるし、文字を知ってこそ観相の余技を可能にさせる。自分が死んでから息子が乞食になるのを防ぐために、嫁の徳で息子を養わせようとする慈父。19例。

産神問答型；父親の身分は貴族層だが、経済的に没落しているために借金しに行く、または塩売り行商など肉体労働をしている。文字の知識が必要な観相の余技はなく、行き暮れて産神問答を聞く。息子の将来を心配する慈父。3例。

白丁は私賤のひとつである。戸籍から除外された賤民階級として家畜類の屠殺を主とし、副業として柳細工物も作った⁹⁾。貴族層の両班と白丁の結婚は法律違反であるからいろいろ障害があり、この障害を乗り越えるためにいろいろな手が使われる。息子が妻の身分を知らないことが多い。知っている場合、科挙の試験が受けられないとか友達にからかわれる、親戚一同に非難されるなどと不都合が多い。父親は息子が離婚してはいけないと遺言し、嫁には別れてはいけないと諭す。しかし豊かな生活が妻の福運のおかげであることを知らない夫は父親の死後離縁するか、暴力を振るって白丁妻を叩き出す。

初婚型の娘と違い白丁妻は子供もいるために婚家を出るまいと粘るが、出ざるを得なくなる。夫の暴力や浮気を詳細に語るものが多い。

その他の様相

炭焼家で青年と暮らすのが一例のみ父親というのがある。白丁の妻が婚家を出るとき持ち出すのは福米・絹服などは<初婚型>と同じだが、粟と酒が新たに出てくる。<初婚型>が子供に関してほとんど言わないのに反し、前夫に子があるというものが10例、炭焼きとの子を言うもの16例。3兄弟が多い。朝鮮人参が金塊と一緒に出てきたりする。

金塊の売り方に関しては省略される傾向があるが市場に出すものが15例、長者に売って長者が減るものが3例。

再婚の夫と前夫の間に立って

身分は最下層でも何年間か両班家で暮らしてすっかり上層階級になってしまった白丁妻は、炭焼き青年にとって<初婚型>の娘と同じくもったいないほどの押し頂く妻である。だから妻の言うことは何でも聞いて優しい。優しい夫と何人かの子供にも恵まれ、有り余る金もある。これ以上望めないほどの幸せな状態なのに、なぜか暴力を振った前夫を探す。前夫にいろいろの手を使って改心させてから前夫に戻る。前夫に戻る理由を挙げてみよう。

- a、義父の頼みや前夫のところに残した子供のため。
- b、父母の決めた夫だから。
- c、二人の夫と子供を加えて議論して、または郡守などの意見を聞いて前夫に戻るのが婦道であると結論を出した。
- d、炭焼き家には財産と子があるから再婚すればよい。前夫は自分がないと暮らせない。

どの答えももっともらしいが、それでは優しい再婚の夫への義理はどうなるのだという疑問がどうしても消えない。そのためか<初婚型>がほとんど父親に孝養を尽くして終わるのに比べて前夫に戻らないものが幾つかある。二人の夫のところに一年ずつ交代で暮す、女の羽の下で家を建て結婚し子をなす、前夫の財産を買い戻しておいて与えるなどがある。孝養というものが親の子に対する態度に関係なく子としての義務だから、父親に戻るのはむしろ当然ともいえるが、前夫に戻るのが稔然としないための変形だろう。語る人が福運が強すぎてもきつい人生になるなど感想を述べたりもしている。

女主人公の社会的な身分は<初婚型>が最上層であるのが、<再婚型>は最低層の白丁と大きく変化している。夫とその父親の身分も経済的没落層と富裕層などに分かれ、朝鮮朝の階級社会の分化や確執を反映している。

朝鮮朝はその初期、支配層としての両班が権威を維持できるように数を制限していた。しかし壬辰・丁酉乱（朝鮮の役）や丙子胡乱などを経て階級制度が乱れ始め、支配階級である両班も土班、残班などに、農民層も小作や富農へと分化が激しくなっていく。不自由民の奴婢階級は自らその社会的階級的地位を絶えず高めていき、その実態が一般良民とほとんど同じになったために1801年に

朝廷はほとんどの公奴婢を解放した。一般良民は両班への上昇を図るが、それは身分が上昇すると経済的な見返りが得られたからでもある。身分上昇はいいことばかりだからほとんどの人の、絶えざる願いだっただといっても間違いはないだろう。

女の身分上昇は「玉の輿に乗る」ことが考えられる。有名な「春香伝」のテーマは身分制度に捉われない若者の愛の勝利ではなく、春香の命がけの身分上昇の戦いだという説も支持されている¹⁰⁾。ヒーローの李夢竜は上層の両班であり、ヒロインの春香は妓生という不自由民である。〈再婚型〉の中にも普通の両班が白丁と結婚するはずがない、きっと何かあると止めてくれても、娘自身がどんな人でもいい、政丞（両班のみがなれる）の嫁になるのが夢だと語ったりする。炭焼き夫には身分が欠けており、暴力夫には乞食になったとしても両班身分だけは残っている。

この身分確保の動機はもっとうがって見ることもできる。両班の特権層はその権力を利用して豊かな農民を収奪していた。炭焼き家が大金持ちになってもいつ両班の魔の手がのびるか分からない。それを防ぐ確実で可能な方法は、同じく権力ある両班の後ろ盾を得ることである。直接これを語るものではないが、白丁女は前夫に帰ってから両家に死ぬまで施主として生きたとするものもある。また全羅南道の「両班の息子と白丁の娘」など、豊かな白丁が貧しい両班に搾取されるのを詳細に語る。

、韓国の「炭焼長者」〈混交型〉

女が家を出る原因を作るのが父親であれば〈初婚型〉、夫であれば〈再婚型〉と下位分類される「炭焼長者」譚だが、家から追い出したのが父親なのに再婚し、夫が追い出したのに再婚しないという点で混交型とした。家を出るモチーフによって三つの型に分けた。合計7例。

産神問答型；塩売りが産神の問答を聞き、福のないわが息子を、福の有り余る白丁の娘と結婚させる。

男は父母亡き後妻を追い出す。女は努力し、自分の徳で生きる。夫が物乞いにくる。恥じる夫を諭し、再び一緒に暮らす。金塊発見はない。1例。

観相型；両班家の息子は乞食相なので福相の白丁の娘と結婚させる。男は父母亡き後妻を追い出す。炭焼き小屋に行き着いた白丁女が炭焼き場で金塊を発見する。女は旅館、または乞食宴会をして夫の訪れを待つ。夫を反省させてから再び一緒に暮らす。2例。

青霜寡婦型；朝鮮時代後半には、再嫁した女が生んだ子は科挙を受ける資格がないために、上層家庭の女はほとんど再婚をしなかった。結婚してまだ子どもできていないのに、はなはだしくは、婚約はしたが顔も見ないうちに相手の男が死んでしまった、そんな不運な女が青霜寡婦である。女は婚家先で影のように生き、義父母はその嫁を申し訳ない気持ちで見守り、あるいは厄介者扱いしただろう。それはひたすら世間体のためだった。

青霜寡婦はこんな状況を打破しようと自ら婚家先を出る。または義父が世間に向け

ては嫁の葬式を行い、実は家から出して自分の力で生きる道を与える。このためにどちらにしても義父には再び会うことはできない。家を出た女は炭焼き家で世話になる。または千両の占いで炭焼きと結ばれ、金塊を発見して大金持ちになる。4例。

、韓国「炭焼長者」譚の比較

日本の「炭焼長者」譚は女を追い出すのが父親か夫かで下位分類がされる。しかし家を出てからはほとんど同じ構造を持ち、それは韓国のももの同じである。そのため結婚の回数ではなく、家を出るモチーフ別に分類してみた。発端部、展開部、結末部の主要素と社会的反映と思われる身分層を一覧表に示す。

分類	数	結婚回数	追い出す者	金塊発見	再会	身分層（女 / 男）
権威的家父長型	24	初婚	父			高 / 低
産神問答型	5	初婚/再婚	夫			低 / 高・低
青霜寡婦型	4	初婚/再婚	超自然		×	高 / 高・低
観相型	21	初婚/再婚	夫			低 / 高・低

四つの型を語りのバランスで見るとき権威的家父長型は全体的によく整っている。残りの三つは白丁と貴族階級の身分違いの結婚の成立と結婚生活の難しさや、寡婦が男装して夫探しに全国を旅する説明に熱をいれ、金塊発見やその売り方は簡略になり、前夫に戻るときにまた熱意が戻るといふ傾向を示している。＜権威的家父長型＞以外はかなり複雑で長いのだが、それはこの身分違いの結婚を説明するために費やされる。の＜青霜寡婦型＞の主人公たちの階級は＜権威的家父長型＞に近い。これは「炭焼長者型」譚の主題が＜権威的家父長型＞以外は身分の葛藤に移る近代性を示していることを窺わせる。

この四つの型を時代様相の反映度について言えば < < < といえよう。の両親と子供の家庭は家族の原初的な姿であり、の産神は原初自然的に発生し、女が主になって伝承してきた民間信仰の神である。の青霜寡婦型、の観相型はともに朝鮮後期の身分社会の確執を反映しているのだが、青霜寡婦型が主として上層社会の問題であるのに比べ、白丁と両班の結びつきはすべての人々の身分上昇の願いを最大限にかなえている。

巫歌「三公本解」¹¹⁾

巫歌は巫堂¹²⁾の専門集団によって歌われる口承文芸という点で純粹な口碑と少し違うが、「三公本解」が「炭焼長者」譚とほとんど同じ構造を持っているためにその原型かどうかについてよく取り上げられる。「三公本解」は現在濟州島にのみ残り、韓国本土に広がる「炭焼長者」の口承説話

とどのような関係にあるのか論議されているが、解明にまではいたっていないようである。

あらすじ； 乞食の男女が知り合い、三女の末女を産んでから金持ちになる。 両親が誰の徳で生きているかと娘たちに聞き、末娘は期待した答えをしない。 両親が牝牛と旅装、下女などをつけて末娘を追い出す。 後悔する両親の気持ちを偽り、姉たちは末女を追い出す。 末女は道術で姉たちを蜈蚣、馬糞茸に、両親を盲目にする。 たどり着いた家は老父母と芋ほりの三兄弟が住み、末男を夫に選ぶ。 芋畑で金塊を発見し、大金持ちになる。 百日乞食宴会を開き父母に再会する。 父母に前世の縁を説明する。

は実家と婚家先の説明であり、それ以外の は娘の超人的能力を語っている。人間を昆虫や植物に変え、盲目にした後に夫の芋畑を彼女が見に行くと金塊が発見される。超能力者の彼女が芋を金塊に変えたであろう事は容易に想像される。巫堂は現在でも予言をするし、刃物の刃の上に立っても傷つかないなど、超人的力を持つと一般的に思われている。

巫病と言う言葉があるが、これは神から啓示を受けた人が巫堂になることに恐れを抱き、抵抗するために患う身体的、精神的な病である。巫堂になることでしか治癒しない。当人さえ納得しがたい巫としての力を俗人である親兄弟に理解させることは至難の業だろう。両親は金持ちになって慢心するし、姉たちは嫉妬で妹を追い出そうとする、義兄二人は親に不幸で客に無礼と三女の周囲の人物は極めて俗的に描かれる。そんな家族に巫としての力を認めさせるために彼女は超能力を示す。「三公本解」は超能力を周囲に認めさせ、巫堂として出発するまでの成巫過程を苦難の道として語るものとも読める。また巫堂の側に両親と三姉妹、芋ほり青年の側にも両親と三兄弟、結婚するのは三番目同士という整った神話的対称を見せている。

「炭焼長者」譚に比べシャーマンとしての力が前面に出ていて整っている、金塊の売り方指示がないという二点を上げられる。「炭焼長者」譚の娘は一般人であり、シャーマンではないから、暗示はするが超能力は言わない。あとで取り上げる心理学的な解釈で金塊は自己を象徴する。金塊を売るモチーフは自我が自己を認識し、意識化していく過程に相当する。「三公本解」の末娘は既に巫堂になることを決意した選ばれた人間であって、自分自身への疑いはない。自身への疑いを持っているのは家族への説得は成功しないだろう。またユングは三位一体を何か不足した状態と見て四位一体を完成されたものの象徴として重視する。両親と子供三人はこの四位一体に相当すると言えるよう。

「薯童伝説」

『三国遺事』の「薯童伝説」はもっとも古い文献説話のひとつであり、「炭焼長者」譚との関連が言われる。

あらすじ； 百済の山芋売り薯童は新羅王の三女、善花を妻にしようとおもう。 子供達に山芋を与え、薯童と善花姫が密通しているという歌をはやらせる。 朝廷に噂が広がり、臣下たちが善

花姫を流配する。妃は娘に純金を路銀として与える。流配の道に薯童が現れ、二人は結ばれる。百済に同行した姫が生計のため純金を差し出すと、薯童がこんなものは山芋畑にいくらでもあるという。二人は知命法師の力を借りて金塊を一晩で新羅の父王の下に送る。薯童は人心を得て王になる。

『三国遺事』の著者である一然は高位の僧侶であった。「薯童説話」の目的は弥勒寺縁起であることは明確である。これを「炭焼長者」譚と比較するとき、女主人公の地位の転落が目立つ。

は家を出る動機が薯童と大臣たちの積極的な画策によるものを示し、善花姫は抵抗するすべもなく追い出される。流配する責任は臣下に負わされ、権威的父親像もない。金塊発見に関しても山芋を金塊に変えたわけではなく、福運と知恵を持った男にそのきっかけを与えたにすぎない。自主的行動はほとんどなく、金塊も男たちの中で動いて善花姫になんら直接的な力を与えない。主人公は題名が示すように薯童であり、善花姫は脇役に転落している。登場人物がすべて上層社会の人々であるためか、全体的に支配者的な論理で一貫している。

「炭焼長者」型説話の分析心理学的解釈

巫堂は神に神秘的な力を与えられて死霊と生霊を行き来し、司祭・呪医・預言を行うなど精神世界に生きる人たちである。その成巫過程とも読める「三公本解」とほとんど同じで、権威的父に反抗して自立を願う「炭焼長者」型説話は精神的、心理学的な接近をする必要があるように思われる。

ユングによると自我が形成されるときに、自我はその社会の価値観の影響を受ける。女は普通優しさ、美しさ、細やかさなどを獲得していく。自我の確立はそれらの強化であるとき、自我は一面化につながる。すると彼女の中の社会的価値に合わない男性的性質は無意識の中に追放される。無意識の中に追放された性質が人物像となって現れるのがアニムスである。女にとって一番近い男性といえば父親であり、夫であろう。結婚前に自我を確立した女はアニムスを父親に投影するし、親の言葉を疑いもせず結婚し、その後自我の確立に向かった場合は夫に投影されるだろう。まだ若く経験の少ない彼女のアニムスは父親のように権威的であったり、夫のように暴力的であったり、かなり一面的である。

ユングは無意識の自己を人格化して現すとき階層を設けた。影は個人的無意識の主要なもので、主体と同性である。影を越えたより優越した権威、ないし力としてアニマ/アニムスが異性として現れる。アニマ/アニムスは集合的無意識の人格化であるが個人的無意識との境界はあいまいとする。影が個人的な属性を持つためにその存在に気づくことは比較的容易だが、いわば絶対的悪であるアニマ/アニムスに直視し、立ち向かうことは非常に稀でかつ破壊的な体験であるという。

家を出てしまうような過度な自立には無意識の補償が起きる。典型的なものは夢で、その役割は心に均衡をもたらすことである。結婚して親の保護を離れ、まったく違う環境の中で適応するために苦闘し、危機にある彼女のために無意識の補償は金塊を与え、白衣・白髪で杖を持つ老人像、緑

衣童子、百万石長者たちを送り込み、それらと取引させているようである。

自己のイメージは宝石、ダイヤモンドやサファイヤのように高価でまれな価値を表す石である。朝鮮にはダイヤモンドやサファイヤは産しないから金塊が自己のイメージに適する。夢における自己表現が肯定的な父親像であるとき、女性の場合それは心霊的な要因を象徴する老賢者の姿になるという。老賢者が賢明なる忠告や禁止、確信を発するのである。少年の姿は女性では「肯定的」アニムスに相当し、心霊に関する意識的努力が可能なことを示しているという。白衣・白髪・杖の老人は老賢者そのものであり、緑衣童子は少年である。

ユング分析心理学では金塊、トリックスター、白衣老人といった元型的イメージに接近してそれと意識的、創造的に関係を続けて自我と無意識が象徴を通じて結合されていくのが個体化の要であるとする。炭焼長者の妻たちはアニムスと正面きって対決し、破壊的な体験をくぐった末に父親や夫からアニムス像の投影を引き戻し、和解して再び一緒に住むのである。

ユングは意識の五段階を挙げる。第一段階を幼児のように世界と自分が区別できない状態を言い、第二段階は自者/他者の区別が意識化される。大多数の人の発達はこちらで止まる。第四段階で投影が根底的に消滅する。乞食宴会などを開いて父親や夫との再会を図るのは投影が消えたことを意味する。彼らが否定的な乞食であっても受け入れるのは、それが自身の姿であることを認めたからである。この段階で自我の発達と人生の全般にかかわる自己批判的かつ反省的な自我を獲得したと言える。最終段階の五段階は意識と無意識の再統合を目指すポストモダンの段階である。自我の限界が認知され、無意識の力が気づかれる。そのための課題である能動的想像や夢解釈が心と直接に相互作用し、意識的關係を形成した彼女は、かつて一緒に住めなかった家父長的父親や暴力的夫の性格が自分にもあることを認識し、結合していったのである。

このように解釈するとき父親や夫に追い出されなければならない、そしてその父親や前夫に再会する努力をして孝養を尽くし、優しい夫を捨てて暴力的な前夫に帰る意味が鮮明になる。父親や夫に追い出されないことは自我の発達はあってもアニムスの段階に至らないことを意味し、彼らに再会しても帰らないことは第四段階に留まり、統合がないことを意味する。

「炭焼長者」型説話の進行をユング心理学の用語で置き換えてみよう。

父親か夫に追い出される = アニムスの投影

金塊発見 = 自己のイメージ

金塊の売り方指示 = 能動的想像や夢解釈で自我と心が相互作用し、意識的關係を形成する。

父親/前夫との再会の努力 = 投影の根底的な消滅

父親に孝養または前夫に戻る = 意識と無意識間の統合

「薯童説話」はすべての要素があるにもかかわらず、それらが受動的で明確でない。

「三公本解」は と が欠けるが、それは成巫過程を語ったものであるとき必要ない。

<権威的家父長型> <産神問答型> <観相型> は ~ をすべて備える。

<青霜寡婦型> は が欠けている。家を出るモチーフが時代様相を強く反映したために後半部

分がつかずいた感があるが、「炭焼長者」の当初の姿を考えると時の大切な型かもしれない。

李符永は韓国巫の治療過程を 迎（招魂） 合（口寄せ） 送の三過程と見て、特に合の過程で世俗の超脱という高い精神性が含まれるという¹²⁾。それは巫歌「三公本解」も、市井の「炭焼長者」譚もユングの意識の第五段階に到達していることと合致する。

、終わりに

日本と中国、アジアにある「炭焼長者」<再婚型>に関して韓国のもを紹介する目的で出発し、日本の「炭焼長者」譚との比較が常に念頭にあった。そのために用語や見出しがつけられている。しかし日本の「炭焼長者」譚までにはいたらず、今後の課題となった。

韓国に<初婚型>、<再婚型>があることによって「炭焼長者」譚が朝鮮から日本への伝播という仮説が可能になるのではないだろうか。この仮説をまた日本と朝鮮の歴史に引き当てて考えるときに朝鮮の「炭焼長者」譚の古い姿をたどる手立てにもなり、説話の成長という面に光を当てられる可能性を秘めている。

韓国「炭焼長者」譚を社会的、歴史的な説明を加えながら解釈し、最終的にはユングの分析心理学的な接近で人が一生の間心理的に成長していく過程を描いたものであると理解するときに、一見不可解な暴力夫への回帰が納得できると述べた。また初婚型と再婚型の二つの型は自我の発達段階に対応していることも心理学的な解釈である。

柳田国男は直感的に「炭焼長者」譚が黄金の御正体を語ったものではないかと述べている。ユングは自己を人の最も充実した潜在力と、全体としての人格の統一性ととの原型的イメージだとする。自己は人のこころの内なる統合原理として、心の生活における中心的で威信のある立場を占め、したがって個人の運命を握るとした。黄金の御正体は自己である。

（ぼく ぼんみ・本学非常勤講師）

注

- 1) 『神道集』巻第7 第42話 芦刈明神など。本縁譚の型をとる
- 2) 『定本 柳田国男集 第一巻』 筑摩書房 「海南小記」所収
- 3) 同上p、359
- 4) 金田久璋 『森の神々と民俗』 白水社
- 5) 伊藤清司 『昔話伝説の系譜』 第一書房 p、163
- 6) 『昔話・伝説必携』 野村純一 編 学燈社
- 7) 収録集は説話15,107 民謡 6,187 巫歌376 その他21
- 8) 張壽根 『易しい韓国の神話』 ソウル 集文堂 2000年 p、33~34
- 9) 『韓国史辞典』 李弘植博士 編 ソウル チョンア出版社
- 10) 鄭夏英 『春香伝の主題』 『韓国文学史の争点』 ソウル 集文堂 1089年
- 11) 赤松智城・秋葉隆 『朝鮮巫俗の研究』 上巻 大阪屋号書店 昭和12年
- 12) 巫堂：ムーダン・シャーマンの女を指す
- 13) 李符永 「韓国巫俗の総合的考察」 『韓国巫俗の総合的考察』 ソウル・高麗大学校 民族文化研究所 1982年

参考図書

ユングの分析心理学に関しては

『ユング』 林道義 清水書院 s、59

『ユング心理学辞典』A・サミュエルズ 創元社 1993年

『エッセンシャル・ユング』A・ストー 創元社 1997年 など

韓国の近代史に関しては

『韓国近代史』姜萬吉 ソウル 創作と批評社 1985年